
こんなゲームやってみたい。

shinsoku1120

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんなゲームやってみたい。

【Nコード】

N6843X

【作者名】

shinsoku1120

【あらすじ】

こんなゲームがやりたいと思って書いてしまいました。

作者の好みを詰め込みます。

VRMMOものです。主人公はプレイヤースキルが最強です。

あとは初心者ですが。

第1話 初ログイン

脳波の解析が進み、思考を読み取る技術が一般的となった時代。

その技術はゲーム業界にまで広まっていた。

仮想現実、バーチャルリアリティ。

VRと呼ばれるその技術が使われたゲームは一大ブームとなった。

そして数あるVRMMORPGのなか、最大の規模を誇るタイトル、
—ジェネシスオンライン（GO）。

創世記の名を冠するこのゲームのユーザーは1,000万人を越えると言っ。

かくいう俺も今日からGOユーザーな訳で。

「キャラネームを入れてください、か。本名もじってヒュートでいいだろ。種族？人間にしとこうかな。」

キャラエディットウィンドウの空欄を埋め、次へ。

次のウィンドウにはこんなことが書いてあった。

「以下の問いにyes or noで答えてください？1・アウトドアとインドア。どちらかといったらインドア派。」

アウトドア、だからno。

noとかかれたボタンをさわると、次の質問が現れた。

2・本を読むのがすきだ。

嫌いじゃないからyes。

3・友達と言われて10人以上すぐに顔と名前が出る。

うっ、no……

4・好き嫌いがはっきりしている。

no……かな？

5・モンスターと殴りあいたい。

は？殴りあうって……yes。

25・成績が学年一位になったことがある。

yes。

63・兄弟がいる。

no。

86・星が好きだ。

yes。

99・自分が嫌いだ。

……no

100・自分が好きだ。

……yes。

《ありがとうございます。》

キャラクター作成を終了します。

ジェネシスオンラインへようこそ。》

そして軽い浮遊感のあと、俺は始まりの街ケテルに立っていた。

「えっと確か中央広場の噴水前だっけ。」

適当に見当をつけ歩くこと三分、それらしき噴水を発見した。

噴水のへりに腰かけているPCに声をかけた。

「レクター。てことはマサか？」

「よっ。遅かったな。待ちくたびれたよ。」

「わりわり、キャラつくんのにあんなに時間かかるとは思わなかったからさ。」

「ま、いいけどな。じゃ、さっそくレクチャーしてやるよ。フィールドいこうぜ。」

「よろしく頼むわ。」

俺とレクターこと探してみると佐久間昌也は、リアルで同じクラスに在席している。

小学校から10年、長い付き合いだ。

マサは、俺がGOを始めると知るといろいろ教えてくれると言ってきた。

その申し出をありがたくうけ、噴水の前で待ち合わせしていたのだ。

「にしても、ユウト、アバターの外装変えてないのか。リアルのお前をデフォルメったまんまじゃね？」

「あゝ変えんのもめんどかったし、目立たない外見だったら何でもよかったからな。」

「確かに、アバターは美男美女多いからな。ここだったらお前の容姿も目立たないかもな。」

「だろ？ってリアルでもそんなに目立つ方じゃないだろ。」

「はいはいそうですね。」

さっさつ着いたぞ。初心者御用達の狩場だ。まずは、初期装備のひのきのぼうで十分戦えるから頑張ってみ。」

「りょーかい。」

左腰に刺さっているひのきのぼうをぬき、手近なモンスターに狙いを定めた。

意識をそいつに集中させると、モンスターの頭上に名前とHPバーが表示された。

タイニーフロッグ。小さいカエルは、ノンアクティブらしく、緑色の文字で表示されている。

名前と違って、20センチぐらいありそうだが。

とりあえず近付き、ひのきのぼうでたたく。

HPバーが1/4ほどへり、名前の色が赤になった。

カエルはこちらに向けジャンプしてくる。頭突きみたいなものだろうか？

右足を引いて半身になってよけ、空中に浮いたカエルを打ちすえる。

ひのきのぼうと叩きつけられた地面で二回ダメージを食らったカエルのHPは、半分を切る。

とどめに二回、ひのきのぼうで殴ってやると、タイニーフロッグは、黒い煙になって霧散した。

「やっぱ運動神経いいな、ユウ……じゃなくてヒュートは。初戦闘でノーダメージか。」

「いや、あんな直線的な攻撃、普通に避けれるだろ。」

「慣れればな。初心者はなかなかああはいかないもんだ。じゃ、次、スキルだな。」

「技ってやつか。」

「そうそう。」

スキルの発動方法は、モーションと音声の2つある。音声発動はスキル名を言うだけだが、相手に何が来るか教えるようなもんだし、一瞬だけラグがあるからおすすめしないな。」

「となるとモーションの方が。」

「そつ。モーション発動は、このスキルを使うっていう確固たる意志を持って、スキルのモーションをなぞるように体を動かす。したら、システムのサポートが入ってスキルが出るってわけ。ま、最初は音声で動きを知って、モーションで練習ってところか。」

「じゃあ使えるスキルは、どうやって見るんだ？」

「左手で右肩を二回タップすると、ウィンドウが開く。そのスキル欄に書いてあるよ。」

右肩をたたくとウィンドウがあらわれた。そのなかの上から二つ目を選択する。

「ああ、スラッシュユってのがあるな。」

「そーそー、じゃ頑張つて。」

再び手近なタイニーフロッグに狙いをさだめ、スキル名をさけ……
ばずに普通の音量でスラッシュユと呟いた。

上段に振り上げたひのきのぼうを袈裟に振り落とす。

綺麗な斬線を描いたひのきのぼうは、カエルの脳天に直撃。

HPを、2/3ほど削った。

そして、名前が赤にかわったカエルの頭突きをよけ、もう一度、こ
んどはモーシヨンでスラッシュを放った。

音声の時よりスムーズに発動したスキルは、カエルのHPを、全て
奪った。

「うまいもんだ。モーシヨンまで一発か。
さすがだな。」

「サンキュ。次はなにすんだ？」

「もう、戦闘は終わりだな。最後は、転職についておしえとくわ。」

GOは、フリージョブチェンジシステム、通称FJCSというシス
テムを使っている。

転職は、専用の施設でいつでも行える。

初期職業は、剣士、盗賊、魔法使いの3つ。

クエストをこなすか、レベルをあげることで転職できる職業が増え
ていくのだ。

レベルと、ステータスはジョブ固定。

盗賊なら盗賊のレベル、盗賊のステータスになる。

そして、スキルシェアシステムで、覚えたスキルを指定して、他の
職業でも使うことができる。

シェア可能なスキル数は、スキルを覚えた方の職業のレベルによって増えていく。

一桁なら2つ、10台なら3つ、20台な4つといった具合だ。

「どうだ？理解したか？」

「なあ、魔法ってどうやって使うんだ？」

「あれはスキル欄に呪文が書いてあるからそれを覚えなといけな
い。まあ、お前なら余裕だろ。」

「なるほどな。いろいろありがとな。」

「気にすんな。いずれ誰でもわかることなんだからさ。
でこれからどうするよ？」

「まずは、装備をととのえるかな。安い店あるか？」

「ケテルの東地区の武器屋と西地区の防具屋がおすすめかな。
レベルが上がったら職人プレイヤーの店でも紹介してやるよ。」

「そうか、その時は頼む。じゃ一回街に戻るから。」

「おう。っとそうだ、フレンド登録しとこうぜ。」

レクターがウィンドウを操作すると、俺の前にもウィンドウがあら
われた。

レクター からフレンド申請が来ています。受諾しますか？

y e s

レクター

をフレンドリストに追加しました。

「よし、じゃあまた明日学校でな。」

そういうとレクターは転移エフェクトをのこして消えていった。

俺も街の武器屋にむけ移動をはじめた。

第2話 初転職

ビュッ。

耳元を通る矢が視界の端に消えていくのを意識しながら、矢を放った射手、ゴブリンアーチャーに肉薄し片手剣スキル《チャージストライク》を叩き込み、脇に抜けながら、ブロンズソードで胴を薙ぐ。霧散していくゴブリンアーチャーを確認し、周囲に敵影がないことを確認して剣を納めた。

GO二日目。隣のエリアにまで足を伸ばした俺は、その敵が非常に経験値が稼げることを発見。

黙々と狩り続け、たった今レベルが13に達した。

ステータスポイントはまだ振っていない。

昨日ログアウトしてからみたGOの情報サイトには、ステータスポイントは、全職共通なため序盤はためておいた方がいいということが書いてあった。

ステータスはレベルアップでもあがるのでそれでも十分らしい。

レベルアップ時、ステータスポイント2Pのほかに、ジョブポイント5Pが手にはいる。

こちらは、ジョブ固有なため、ちゃんと振り分けている。

JPが振れるのは、アクティブスキルと、パッシブスキル。

このパッシブスキルには他の職業になったときに効果を発揮するものもあり、俺はそれらに全振りしている。

フェンサーVETは、他の職業の時スキルレベルに応じてVETが上昇する。

フェンサーSTR、フェンサーHPも同様だ。

だが、これらの効果は剣士の時は発動しない。まさにフリージョブチェンジシステムのためのスキルと言えるだろう。

各20レベルまでカスタムしたため、剣士でこれ以上レベルをあげる必要はない。

街に帰って転職することにする。

街への帰路の途中、昨日レクターときた狩場に差し掛かったとき、声が聞こえてきた。

見ると、女性キャラがタイニーフロッグと戦っていた。

「いや！カエルきもい！来るな」

戦って……るのか？

カエルが跳ねれば必要以上に避け、大きく避けるため、ジャンプ後の際に攻撃できない。

つまり、一方的に逃げまくっている。

「ちょっとその人！カエルどうすればっ！くるな！」

関わりたくない。

さっさと通りすぎてしまおう。

だが運命は時に厳しい。

「たすけて！あたしカエルさわれないの！」

じゃあ何でここにきた！

どうやってターゲットとつたんだよ！

「とりあえず落ち着け。さわるのはそのひのきのぼうであってお前じゃない。だいたい最初は攻撃したんだろう。なら攻撃出来るだろう。」

「あ、そっか。」

そういつてそいつはタイニーフロッグに向かっていった。

俺は、さっさと街へ走り出した。

転職をする施設の名前は協会。

セーブはしないが死に戻りの地点は最後に立ち寄った協会だったりする。

大きな女神像の前で祈りの姿勢をとる。すると、アバターはそのま
まに、ゲーム開始時、キャラエディットをした場所に移動する。

ほかから見たら祈っているように見えるというわけだ。

手早く転職作業をすませる。

転職先は、盗賊だ。

転職完了のボタンを押すとアバターに意識が戻る。

装備は、変化していない。

レベル1から使っているのだから当然なのだが。

ステータスウィンドウを開くと盗賊の初期ステータスの横に補正値
が表示されていた。

VITとSTRは+20。HPは+200となっていた。

一応は満足してウィンドウを閉じ、再び狩場に向かう。

さっきのところを通るのは避けたいがほかに道はない。

仕方なく街からでて、フィールドを進むと向こうから奴が来た。

同時にあちらも気づいたらしく、こちらへ駆け寄ってきた。

「あんたっ。さっき狩場で会ったわよね？」

「気のせいだろう、といたいけどあつたと思う。」

視線にまけ、素直に認めてしまった。

「さっきはありがとう。ちょっと冷静さを失ってたから、落ち着かせてくれてたすかったわ。」

「気にしないでいい。じゃ、またな。」

立ち去ろうとしたら襟元をつかまれた。

「ぐえっ。」

「でさ、あんなのも何かの縁って事でフレンド登録しない？」

「……また今度な。」

「何で!」

苦しい、絞まってるって!

「とりあえずはなせ!首がしまってるっ!」

「あ、ごめん」

解放された首をさすりながら女の方を振り向く。

「俺とお前がすれ違ったのは偶然、ここで会ったのも偶然。だから次あつたとき、三回目があつたら縁があつたって事で。というわけ

でまた今度な。」

「むー。納得行かないけど仕方ないわね、今度あったらフレンド登録しなさいよ。」

諦めてくれたか。内心ほっとため息をつくが顔には出さずまたな。とって別れた。

狩場、（今更だが地図で確認すると蛙のすみかというらしい。）を抜けて、やって来た小鬼の谷。

剣士の時より素早い動きでゴブリン達を狩っていく。

盗賊にはアイテムを盗む技がある。モーション自体は普通の切りつけどが、一定確率でアイテムを盗むステイルを使ったりして、レベリングにいそしんだ。

ゴブリンには、普通のゴブリン、いわゆる無印と、ゴブリンアーチャー、ゴブリンルーキーがいる。

三、四匹で群れを形成しているゴブリンに対しては囲まれてはいけない。

常に全ての敵を視界に収め、一対一を繰り返すように位置をとる。

そして、迅速に敵を処理していく。

昨日戦っていて気づいたのだが攻撃を当てる部位によってダメージが変化するようだ。

ダメージが多いのは首に頭、胸、というより心臓の辺り。

急所に当てれば、少ない攻撃数でモンスターを倒すことができる。
多対一においてかなり役に立つ。

無印ゴブリンの首を切り裂き、返す軌道で胸を深くきりつける。

STRの補正のおかげか、二太刀で絶命した。

その場に留まることなく次のゴブリンへ、後ろを矢が抜けて行つた
が振り返ることはしない。

ゴ布林ルーカーの首を一刀の下に切り飛ばし、ゴ布林アーチャー
の胸を薙ぐ。

ダメージでノックバックしたゴ布林アーチャーの首を切り上げて
両断した。

「ふう。レベルは……8か。あと二匹も倒せば上がりそうだな。9
になったら落ちるか。」

とりあえずの目標を定め、ブロンズソードを握り直した。

第3話 初上位職

蛙の棲みかを、小鬼の谷とは反対へぬけ、小さな川を渡ると、実体を持たないエレメント系モンスターの生息域に入る。

これらのモンスターは総じてHPが少な目に設定されていて、魔法使い系のレベル上げ効率がいい。

「精霊よ。形は球、性は火。我が下に集いて敵を焼け。《フレイムシュート》」

詠み上げた呪文によって魔法が発動。バスケットボール大の火の玉が尾を引いて青色のエレメントに直撃した。

ブルーエレメントの文字の下に表示されたHPバーがごっそりと削られる。

それともにモンスター名の表示が赤に変わり、詠唱中を示す青光の帯状のエフェクトが表示された。

だが、詠唱中の硬直を狙いシーフDEXで補正された敏捷力を生かし間をつめ構えた杖でエレメントを殴り付ける。

残り数ドットだったHPを散らしたモンスターは、黒い霧を上げて霧散した。

シヤラン。とレベルアップSEが聞こえた。

目標値に達したことを示すそれを聞いて俺は左手で右肩をタップする。

レベルアップで入った スキルポイントをマジシャンMINに振って補正系全カンストを確認した。

「やっと終わりが。呪文言うの精神的につらいな。」

苦笑いを浮かべて手に持った杖を肩におく。

やけに気疲れしたマジシャンもこれでお別れだと思つと寂しいものがある。

剣士と魔法使いがレベル10をこえたため、魔法剣士に転職出来るようになったっているはずだ。

剣士でもスキルシェアで魔法を使うことができるが、職業ごとにステータスポイントが違って来る以上は火力も種類も魔法剣士のほうが上回ってくる。

そのかわり防御が紙らしく恐ろしく使い勝手が悪いジョブらしいが、普段から攻撃を避けることで対処している俺からしてみれば大した問題はない。

そんなことを考えながら街へ。

途中、知ってる顔を見た気がしたが気のせいだろうと思つて教会にはいる。

女神様の足元で三度目の祈りを捧げた。

「魔法剣士に転職出来るようになりました。」

忍者に転職出来るようになりました。

僧侶に転職出来るようになりました。」

システムアナウンスによると、魔法剣士以外にも転職出来る職業が増えたようだ。

それぞれの説明やスキルを確認する。
傾向としては、

魔法剣士

剣技も魔法もこなす万能型。しかしVIT、HP は低め。
器用貧乏とも言える。

忍者

隠密に長けた忍の者。突出したDEX、LUCを持つ反面VIT、STR、HP は低い。

僧侶

味方を癒す回復術の使い手。自身の戦闘力は決して高くはないが、パーティーには欠かせない回復役。

こんなものか。魔法剣士は、予想より敏捷力が高い。

だがそれ以上に引かれるのは忍者だ。

習得スキルに水上歩行、分身の術に変わり身の術まである。そしてなによりも。

口寄せの術。

.....。

.....なにを？まさかカエルがきたりするの？

めっちゃ使いたい。口寄せの術！ボン！ゲコ、とかやってみたい。

だが、目標にはこの忍者は寄り道となる。ここは、涙を飲んで.....

「忍者に転職しました。」

.....あれだ。これはゲームなんだ。楽しんでなんぼなのだからやりたいものをやろう。

自分に言い訳をして納得したところで、アバターに意識が戻った。

魔法使いに比べてあきらかに素早く動ける体に戸惑いながら教会を後にした。

思わず忍者に転職してしまったが、これだって悪くないはずだ。

最終的職業は決めているがそこに至るまでに寄り道があっただけではないはずだ。うん。

忍者になったことではずむ気持ちを押さえながら武器屋へ。

盗賊の時は買わなかったナイフを買い、ただの手裏剣も買った。

どうも俺は形から入るタイプらしい。

ほんとは黒い装備もほしかったのだがさすがにそれは、無駄遣いだろつと自重。よって武器だけをそれらに換えて一路蛙の棲みかへ。

はやる気持ちを押さえながら街の門を出た。

フィールドをダッシュで駆け抜け蛙の棲みかにやって来た。だが、

「えいつ、やあつ！」

残念ながら先客が。

落胆を隠しきれず、仕方なしに小鬼の谷に向かう。

「《忍び足》」

タイニーフロッグで慣らしとモーションの確認をしたかったが他人の狩りの邪魔をするのはマナー違反だということぐらいは知っている。

なので邪魔をしないように隠蔽スキルを使って棲みかを抜ける。

別にその先客と関わりたくないとかって訳は無かったりしなくもない。こともない。

無事気づかれず小鬼の谷へこれた。

まずはスキルのモーション確認のために音声発動で何匹か倒す。

適正レベルにはまったく足りていないが、フェンサーSTRの恩恵か、中々のダメージを与えられた。

そしておまぢかねの口寄せの術。

「《口寄せの術》！」

音声発動によるシステムサポートが入り、体が勝手に動き出す。

胸の前で手が複雑な印を結び地面に手を押し付ける。

ポワンツ。と音をたてて煙が吹き出し何かを口寄せした。

煙がはれてきてその輪郭があらわになった。

ふさつとした尻尾。

つんつとした鼻。

つぶらな瞳。

犬。どこからどうみても犬がそこにいた。

確かにガマガエルじゃなかったのは残念だ。

だが、いい。これでもありだ。

あえて言おう。犬が好きだと。

ああカエルを望んでいたさっきまでの自分を殴ってやりたい。

犬最高。犬こそ正義。犬こそ愛である。

全ての犬に喝采を！

何てことはどうでもよく。

「ゴブリンアーチャーを倒せ！」

簡単な命令に従うだけの、犬だが、素と防御力はそれなりにある。

忍者が多対戦の時に壁役として使うらしい口寄せ獣に後衛のタゲをとらせ、前衛の間を敏捷力にものを言わせ殲滅する。

振るわれた剣やこん棒を横に回り込むように回避。

ナイフをひらめかせて首頭胸を連続で切りつけHPを削りきる。

断末魔をあげて霧散を始める頃には次の標的へ。

遠めから手裏剣で怯ませ、スキルシェアで入れたチャージストライクで一撃死。

わずかな技後硬直を狙ったゴブリンアーチャーは、犬の攻撃で行動キャンセル。

俺は再び手裏剣を取りだし、投擲。
最後の射手の眉間に刺さり、ガクツと減ったHPバーに追い討ちをかけるように犬の止めが入った。

口寄せから10秒にも満たない。

一人では矢を避けるために動き回らなくてはいけないが犬の存在がその必要をなくしてくれた。

「忍者、たのしーわ。」

その言葉には単純な効率とは別の感慨が籠っていたように思う。

だって顔がにやけてたし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6843x/>

こんなゲームやってみたい。

2011年10月19日09時21分発行